

## 2. 話題提供

# 地域らしさの未来を考える -ともに作りともに使う未来デザインの「型」とは？

総合地球環境学研究所 熊澤 輝一

### 1. はじめに

熊澤と申します。この話題提供では、民主主義の主権者の側にいる市民に着目し、「市民にとっての地域」（「地域にとっての市民」）という目線で未来について考えます。市民がそれに関わる研究者とともに育ちながら、行政や議会と協働しながら地域の未来を選んでいけるようになるには、どうすればよいか？そのためには、市民が地域のことを自分なりに知り、その将来を考えられるようにしておく必要があります。なかでも、自分が「関わる」地域が、どのような特徴を持つのかを把握しておくことは、その地域をアピールしたり、マッチングを図ったりする上での重要な手がかりになります。未来を選ぶ際も、そんな「地域らしさ」を捉えようとしながら、選ぶことができればよいと考えます。

では、「地域らしさ」をきちんと意識しながら未来を選ぶにはどのような手立てが必要なのでしょう。その前に、そもそも、なぜこんなお題の発表をするのかを考えてみたいと思います。それは、一言で言うと、民主主義の主権者たる民衆の一人ひとりが、地域の特徴を捉えながら地域と自らの将来



について考える、そういった力を高めることが、地域の環境と社会の持続可能性を高めるのではないか、ということです。問いを少し詳細にしますと、「実践する者にとって使い馴染みがよく、研究する者がその職能をもって持続的に、未来の選択に貢献できる手立てとはどのようなものか？」ということです。今回は、この手立てのことを未来デザインの「型」と呼び、選ぶための段取りと方法、選んだ結果を点検する方法について考えていきたいと思います。

## 2. 地域らしさの未来を考えること

まず、「らしさ」という言葉ですが、調べると「その人や物事の特徴」のことです。「特徴」とは、「他と比べて特に目立つ点。きわだったしるし」ということ。「らしさ」を直接扱えないところがまだまだ勉強不足なのですが、今回は、ひとまず「特徴」の意味で扱いたいと思います。では、そんな地域の特徴を捉えることになぜ意識的になるのでしょうか？それは、人間と自然を二元論的に考えないということです(注1)。言い換えると、「人にとっての自然」「自然にとっての人」という捉え方をする、ということです。

市民主体の地域と環境のガバナンスをそのような視座でみると、ガバナンスの目標を一言にまとめると、「かかわりあう中で育つ人と自然」ということになります。地域の人として「育つ」には、地域のことを自分なりに知っておく必要があります。その将来を見据えつつです。なかでも、自分が関わる地域が、どのような特徴を持つのかを把握しておくことは、その地域をアピールしたり、人のニーズや取り組みが地域に適合しているかを判断する上

1)「環境」は、人と人の〈あいだ〉であるとともに、人と自然の〈あいだ〉でもある。〈あいだ〉- AのものでもBのものでもなく、そのゆえにAのものでもBのものでもある。(木岡(2014)『〈あいだ〉を開く-レンマの地平』世界思想社、p.188)

で重要な手がかりになります。しかし、二元論的に考えないといっても、物事の共通理解や意思決定のプロセスでは、どうしても分析的に考えざるを得なくなります。いったいどうやって考えればよいのでしょうか？それを支える手立ては？

次に、地域の未来を考える場面について整理してみますと、「調べる」「学ぶ」「目的（理由）・目標を考える」「ものさしを作る」「企画をつくる」「場を設定する」「語り合う／意見やプランを組み合わせる・編集する」「選択肢を用意する」「流れをつくる（シナリオ）」「調整・合意形成する」「選ぶ・決める」「点検・評価する」「異議申立をする」といったものがあります。このような場面で研究者はどのような役割を果たすのでしょうか？

以上の課題を反映しながら議論するための枠組みとして、出発点になりそうなのが、環境保全における順応的ガバナンス（注2、3）の考え方です。その要件は3つあって、(1) 試行錯誤とダイナミズムを保証する、(2) 多元的な価値を大事にし、複数のゴールを考える、(3) 多様な市民による調査活動や学びを軸にしつつ地域の中で再文脈化を図る、です。では、この順応性を保ちながら間違わないプロセスを維持していくにはどうすればよいのでしょうか？それには、ポイントが5つあって、①複数性の確保、②共通目標の設定、③評価、④学び、⑤支援・媒介者です。これらの「仕掛け」は、プロセスを駆動するためのツールです。なお、近年は、持続可能性を扱う学術自体が、このようなプロセス志向のものになりつつあります（注4）。この点を併せてご紹介しておきます。

というわけで、ここからは少し操作的・手段的な論の立て方になります。まず、地域全体を対象とした環境と社会のデザインについて、滋賀県高島市

2) 宮内泰介編（2013）『なぜ環境保全はうまくいかないのか－現場から考える「順応的ガバナンスの」の可能性』新泉社、p.331)

3) 宮内泰介編（2013）『どうすれば環境保全はうまくいくのか－現場から考える「順応的ガバナンス」の進め方』新泉社、p.343)

4) Miller TR (2013) Constructing sustainabilityscience: emerging perspectives and research trajectories, Sustainability Science, Vol.8(2), pp.279-293, Springer

朽木地域での地域づくりを事例にお話します。次に、特定の対象・エリアに焦点を当てて環境と社会に働きかける事業について、京都府木津川市での里山活動を事例にお話します。これらを通して、地域らしさの未来を考えた上での設計から行動へ、また行動の判断材料となる「ものさし」について考えてみたいと思います。

### 3. 皆で地域の未来を考え、設計する

ここでは、滋賀県高島市朽木地域での地域づくり事例に、皆で地域の未来を考え、設計することについて考えてみたいと思います。朽木地域は、滋賀県西部の京都、福井との府県境付近に位置する山間地で、2005年に朽木村から高島市に編入したところです（注5）。そこに、2015年4月に策定された地域の住民福祉協議会による第2次朽木住民福祉活動計画（計画期間：平成27年度～31年度）（注6）というものがあまして、これを進めるお手伝いをすることで関わらせてもらっています。今年度が3年目です。

1年目は、今回のセミナーを催されている東京大学の梶谷真司教授に来ていただいて、哲学対話を数回行いました。問いを出して話し合うことで、自分を知り、他者を理解する。そして、地域づくりに必要なコミュニケーション・スキルを底上げする、という趣旨です。中学校でも2回実施しました。

次に、朽木地域とその周辺では、「へしこ」という鯖のぬか漬けが、伝統食材としてありまして、これを使った新しい料理を皆で作って、料理を囲んで対話をしよう、という企画を3回行いました。対話を進めてくれたのは、同

5) 滋賀県西部の京都、福井との府県境付近に位置する山間地。面積：165 km<sup>2</sup>。2005年に近隣6町村の合併により高島市に編入。豊かな森林資源からかつては林業が盛んで、安曇川では木材運搬のための筏流しが行われた。筏流しの水運安全を祈る「シコブチ」信仰が伝わっている。木地山地区などでは木地師による木工芸も発達した。鯖ずしやトチ餅など名産品も多い。人口減少、少子高齢化が急速に進んでおり、移動や医療・福祉の問題が地域住民にとっての喫緊の課題となっている。

6) 「みんなで支えるための～つなげる力～」、「生きがいをもちて生きるための～学びあえる力～」、「元気で安心して暮らしていくための～地域力～」が三本柱。

じく梶谷さんです。食べ物が題材だとたくさんの方が来てくれますし、皆楽しそうです。へしこの家庭での食べ方、漬け方についてのお話・情報交換や、へしこを使った料理の調理と試食しながらの対話を行ないました。講師もお招きして新しいメニューをご紹介いただきました。この企画はへしこを介して対話をし、朽木を知ろうという企画でした。

2年目からは、より時間軸を意識した企画を立てていきました。まずは、豊かな過去を持って未来と向き合うということで、古写真を用いたワークショップを街場と奥のエリアでそれぞれ3回ずつ行ないました。伝統食材の次は、昔と今の写真から朽木を知ろうということです。社会脳科学とよばれる分野での研究成果なのですが、未来に対するアイデアの創出には、じつは過去の記憶の想起が伴う（あるいは必要である）そうです（注7）。

ワークショップで用いた古写真は3種類あって、『朽木村史』（注8）の編纂の過程で収集された写真のうち、提供者から使用の許可が得られた写真（注9）、現地調査を進める中で、お借りして使用を認めていただいた写真、ワークショップの場で参加者から提供いただいた写真です。これらを素材に、近江の歴史研究が専門の鎌谷かおる研究員（現在、立命館大学准教授）が進行役となつて、「変化したもの」「変化しなかったもの」「残っていかなかったもの」といったトピック別に、現在の写真と比較したりしながら古写真を紹介した後、話し合いました。

最終回は、街場と奥のエリアとで内容が分かれていましたが、特に街場では、持参した写真のよさを未来の朽木で暮らす人に向けて語ることを通して、私たちが「残していきたいもの・こと」を表出させるための作業を行ないました。作業は原稿作り（タイトルも考えます）、語りかけ（制限時間2分）の順に行いました。物静かな方も、しっかりとした口調で未来の人に語りかけてく

7) 奥田次郎・藤井俊勝（2012）「展望する脳」芋阪直行編『社会脳科学の展望－脳から社会をみる』、新曜社、pp.1-33

8) 旧朽木村時代の平成16年度から編纂事業が始まり、高島市への合併後の平成22年に発行（朽木村史編さん委員会（2010）『朽木村史 通史編・資料編』滋賀県高島市）。

9) 高島市教育委員会文化財課にご協力いただいた。

れました。

3年目は、未来の物語を作ることがゴールです。これが、3年間の最終ゴールでもあります。しかし、未来の物語を作るにしても、出発点である現在の市民の活動とそれぞれの思いについて、私たち自身ももっと知らねばなりませんし、それを整理して地域の方々と共有しておく必要があるな、ということになりました。そこで、市民の活動から朽木を知るべく、朽木地域で活動する計12グループ、延べ55名からの聞き取りを、事務局を務めている中間組織の「たかしま市民協働交流センター」と実施しました。伺ったのは5つで、①活動をとおしてめざしていること、②現在の活動、③解決したい地域の課題、④朽木地域の将来イメージ、⑤朽木らしいエピソードについてです。

その調査結果を受けて、「未来へつなぐ物語づくり」と題したワークショップを4回実施することになり、現在は3回目まで終わったところです。30年後の朽木に残したいこと、あったらいい仕組みについて、事務局の方で聞き取りの結果に基づいてたたき台を作り、それを何のために残したいと思っているのか、今からするとよいことについて話し合いました。林業に関わっていない若いお母さんから、広葉樹への植え替え、土地の境界の把握といった課題や意見が出され、これらをもとに、最終回は、5年後、10年後、20年後にどんなことをしているとよいかを話し合うことになっています。(最終回は、セミナー後の2月4日に実施し、これから30年後までの「未来年表」を作成しました。)

このように、朽木地域では、対話を軸に、過去、現在、未来を行き来しながら、地域らしい未来を探る取り組みを行なっています。皆で考え、設計するための方法論として洗練するには、まだまだ蓄積が必要ですが、それに至るため

の過程としてご紹介させていただきました。

#### 4. ものさしを出し合いながら行動する

次は、京都府木津川市での里山活動を事例に、ものさしを出し合いながら行動することについて考えてみたいと思います。場所は、奈良県と接している木津川市です。そこに、木津北地区というところがあって、「鹿背山（かせやま）」と呼ばれています。この里山が、今回お話させていただく活動の対象地です。木津北地区では、当時の都市基盤整備公団（現在のUR都市機構）によって住宅地開発が計画されていたのですが、それが2003年の国土交通省の通知を受けて中止になり、木津川市に無償で移管された土地です。木津川市としては、鹿背山を市民にとって有益な形で利用しつつ、適切な管理をしていかねばなりません。そんな背景で作られることになったのが、「生物多様性木津川市地域連携保全活動計画」です。

この計画は、多様な主体による協働が柱になっています。そこで、計画の作成にあたり、計画を協議してとりまとめる協議会とは別の機会に、実際に現場で活動している団体のメンバー、市の実務担当によるワークショップを実施することになり、その企画をお手伝いすることになりました。活動団体が自ら目標を掲げて指標によって自己点検できるようにと、目標、方針、指標づくりを中心に据えたワークショップを2012年から13年にかけて実施しました。

行なった作業は主に3つで、①自らの活動の指標づくり－実際に活動されている方々自身による活動目標と成果指標の提案、②キーワードをまとめて

(構造化して)計画全体の短期目標と長期目標をつくる、③行動指針をつくる、というものです。さて、活動目標と成果指標にどのような特徴が現れたのか、活動団体による違いを見ていきましょう。

活動団体には、里山景観の維持管理という枠組みで竹林整備や田畑の再生、生物調査を行っている団体、鹿背山城という歴史文化遺産を大事にしている団体、鹿背山の名産である柿を市民で育てている団体、キャンプや環境学習プログラムといった要素を重視しながら里山を整備している団体など、いろいろな団体があります。その活動目標と成果指標は、団体の趣旨に沿っているものもあれば、おやっと思うものもあります。たとえば、鹿背山柿を育てる「鹿背山の柿を育てるネットワーク」さんは、柿についての目標を立てていません。これは、「実績に基づく目標は無理」、「目標を達成できないとがっかりする」ということで、あくまでも自然を対象に人々のやりがいを核とすることに重きを置いています。

そして、里山の手入れと環境学習プログラムを融合させた「鹿背山元気プロジェクト」では、「芸術祭」を実施しています。これは里山を美術館に見立てて芸術作品を展示したり、たとえば、ネズミサシという木についてのギャラリートークをシートに記載して木に吊るしたり、といったことをしています。このように、手入れと教育に芸術という要素が加わることによって、この団体の活動内容は豊かなものとなっていますし、若い芸術家も参加してくれています。近隣のニュータウンに住む人たちが親子で参加し、中には運営に携わるようになった人もいます。これまで、こういった形で自然と関わってこなかった若いお父さん、お母さんも、子どもが参加することをきっかけに里山に関わるようになる。一般に里山活動といえばシニアの方が多いのですが、この団体はちょっと違います。当初の活動目標と成果指標では、その



ような若い世代の参加と彼ら彼女らへの継承は、項目にはなかったのですが、項目立てを超えた取り組みがなされています。さらにこの活動団体では、隣接するニュータウンの小学校や地元の高校のシステム園芸科、さらには地元造園家との連携関係も築いています。これらもまた、活動目標と成果指標の項目にはなかったことです。

ここまで、「ものさし」を出し合いながら行動すると銘打ってお話してきましたが、うまく回っている取り組みでは、ものさしを超えた状況を生み出していることもあります。超えていると判断できるという意味でも、自らの活動を点検し、次期の判断材料とする仕組みがあると、外部の者が見たときにわかりやすいのはもちろんですが、内部の人間にとっても、その活動団体が置かれている状況をより客観的に捉えて、次の行動に結び付けられるように思います。そして、次は、このような形で動き出した取り組みから、地域の将来と自らの未来設計について考えるための機会をどうデザインするのか、といったことに課題が移り、朽木地域のケースでお話したような取り組みのステージに戻るわけです。

以上を「地域らしさ」に迫りながら未来を選ぶサイクルとしてまとめると、

- ① 調べる－皆で（仕組み、出来事、状態、意識などを）調査する
- ② 過去・現在・未来から地域らしさに接近し、語り合う－分かち合う・情報・知識を共有する
- ③ ものさしを作る－データ化する
- ④ 行動する（現場活動、連携活動）
- ⑤ 点検・評価する：個々の活動の点検／社会－生態システム持続可能性の観点からガバナンス全体を学術的に点検する（注10）
- ①となります。

10) 点検のための枠組みとして、社会－生態システムの持続可能性を診断するための分析枠組を示した Ostrom(2009) などがある (Ostrom, E (2009) A General Framework for Analyzing Sustainability of Social-Ecological Systems, Science 325, pp.419-422)

## 5. さいごに

最後に、地域づくりにかかわる研究者は何かできるのか、ちょっと考えてみたいと思います。その参考になるのではと思うのが、地球研が京都の府立高校の洛北高校に対して行なっている環境研究支援のケースです。私は2015年と2016年の2年間担当しました。スーパーサイエンスハイスクール(SSH)の事業なのですが、高校生が自ら課題を設定して調査をし、考察を深めつつ提案をする取り組みです。大学生も驚くような研究成果を出す班もあります。このようなことを地域の人々にも広く展開できないかということです。研究者は、地域の人々による課題設定、調査・分析をサポートすることで、彼ら彼女らの地域への理解や課題解決への提案をお手伝いする。今後、地域づくりに関わる研究者に期待される新たな役割のように思います。

それから、「よそ者」であることを利用して、地域社会（行政、NPO、地域組織など）が提案・適用した枠組み、スキーム、モデルを点検する、いわゆるメタ分析を行なうというのも研究者が果たせる役割のように思います。そのための共通語彙を提供する技術もありまして、「オントロジー工学」といいます（注11）。

11) Kumazawa T, Kozaki K, Matsui T, Saito O, Ohta M, Hara K, Uwasu M, Kimura M, Mizoguchi R (2014a) Initial Design Process of the Sustainability Science Ontology for Knowledge-sharing to Support Co-deliberation. Sustainability Science, Vol.9(2), Springer, pp.173-192

では、今回の話題提供の内容を以下にまとめます。今日はありがとうございました。

- (1) 地域らしさに迫りながら未来を考えることの意義を整理した上で、その動的なプロセスを示した。
- (2) 地域らしさに迫りながら未来を考えることの実践と課題を紹介した。  
考えるための段取り／考えるための方法／考えたことを点検する方法
- (3) 地域づくりにかかわりながら果たしていくべき研究者の役割について考察した。



